

(2) 足が震えた恐怖の雪稜～27年振りの雪山

(1993年、木曾・宝剣岳)

1993年のゴールデンウィークはかねてから八ヶ岳に行く積りで計画を練っていたが、連休当初から天候が悪く最後の二日目に入ってやっと天気が回復、急遽夜行日帰りが可能な木曾駒に行先を変更した。

残雪期のそれなりの山に入るのもそろそろ体力との秒読みに入ってきたし、雪山に登るのに初めての山の単独行ではキツイからと、昔親しんだ八ヶ岳をと計画して正月頃から arm-chair mountaineering を愉しみつつ計画を温めてきた。八ヶ岳は過去に3回冬にだけ登っており、私にとっては伯耆大山、劔岳に次いで懐かしい山であるから、計画を作っているとルートあれこれが目に浮かび、いかにも登った感じになってくる。計画書はワープロ(当時は未だパソコンは無くワープロの時代)に入っているの、そっくり来年のGWに楽しみを残しておいて、本題の木曾駒&宝剣岳に入ろう。

ちょっと話が横道に逸れるが、中央アルプスなるものは、私には日本アルプスの中では一番ピンとこない山脈である。まず、その位置からして曖昧である。字面だけでは北アルプスと南アルプスの中間にあるような錯覚を覚えるが、南北方向で言うと南アルプスと同じ緯度で並行しており、中央と言う概念からはほど遠い。今回地図を眺めてみて初めて正確な位置を知った次第。勿論、この山域に入るのは初めてである。序ながら、中央アルプスは木曾山脈、北アルプスは飛騨山脈、南アルプスは赤石山脈が正式な名称であることは小学生でも知っている常識らしいが、不肖この歳になるまで知らなかった。

木曾谷と東側の伊那谷を分けているのが木曾山脈であり、その東側に伊那山地、赤石山脈、身延山地の大山塊が連なっていて、その先に富士山が独立している。木曾山脈の西北には御嶽山が独立しており、駿河湾上空から鳥になって鳥瞰すれば左右対称に見えるであろう。大雑把に言えば、その対象線が日本海側の糸魚川から太平洋側の豊橋まで日本列島を横断するフォッサマグナである。我が部屋の壁に貼ってある関東甲信越のランドサットマップを見ながらこれだけのことを勉強した。地図は嬉しい。またまた横道に逸れた。

さて、木曾駒に辿り着くまでに道草を喰ってしまったが、実際のアプローチは標高差2,000mを千畳敷ロープウェイが運び上げてくれるので、夜行日帰りでこなせる(“こなす”という表現に何となく「百名山」などのカタログ登山のノルマの匂いを感じられる。心すべきことである)。

最近では首都圏からも伊那まで高速バスが通じたので便利になった。しかも、安価である。横浜の高速バスターミナルを出たのが前夜の零時、翌日家に帰り着いたのが23時であったから、ちょうど丸1日行程であった。

寝にくい夜行バスでウトウトしているうちに早朝駒ヶ根着、正面に雪を纏った中央アルプスが眩しい。駒ヶ根からのバスはウネウネとした山道を登って行くが、始終千畳敷と宝剣岳の岩峰を望むことが出来る。駒ヶ根の標高が600m、ロープウェイ終点が2,600mであるから、標高差2千mを乗り物で稼げるのは有り難い。往復運賃4千円は距離の割には多少高いような気もするが、標高辺り1円/mという勘定になるので、これは随分安いものだ。

千畳敷は春スキーヤーと観光客で賑わっていた。ホテルも宿泊客で満員のような感じだった。今日は前日の悪天候と打って変わって無風快晴、雪が眩しい。バスの中にサングラスを置き忘れたことが悔やまれる。春山とはいえ、雪山は昭和41年の八ヶ岳単独行以来、実に27年振りであった。千畳敷の登山指導員に登山計画書を提出。宝剣岳は単独行とノーザイルパーティーは入山禁止という。前日も遭難があったとのこと。また、木曾駒への往復もアイゼン装着を指示された。乗越浄土までの斜面もさほど急斜面ではないのに、皆アイゼンを付けて歩いている理由がこれで分かった。オーバーズボン組も多い。昔は5月の一般ルートでアイゼンを付けるなどということは岳人の恥であり、まして好天下でのオーバーズボンなどはとんでもないという意識であったが、時代も変わったのであろう。マ、“安全第一”は結構なことではあるが、安全第一ばかりを優先していると安全係数が上昇する一方で、万が一の事態に対処でき

る能力は減退するばかりであるとも言える。小生も多少の抵抗を感じながらアイゼン装着に及んだが、なるほど歩きやすい。昔はアイゼン無しで滑らずに歩けたのに今はアイゼンの御厄介になるのも歳のせいかな？この分では街中を歩く時にもアイゼンを履かねばナラヌ羽目に陥るナ。

さて、前日までの空模様から完全冬山装備で来たので荷が重い。新雪が相当積もっているのではないかとワカンも持参しようかと思ったが、どうせワカンをつけねばならぬような状況であれば、初めから登れる体力は無かろうと持参しなかったのが正解であった。新雪の片鱗もなく、すんでのところで恥を掻くところであった。

千畳敷で弁当を食い、茶をテルモスに詰めて出発。2ピッチの片目のケンケンで木曾駒ヶ岳頂上に到着。ポカポカ陽気の稜線散歩。ガイドブックの標準タイムより相当早いピッチで登れたのは、やはりベテランのなせる技と思いたいが、事實はゴロタ石を残雪がカバして歩き易かったことと好天が幸いした結果に過ぎないことを謙虚に認めざるを得ない。いい歳をして未だ歩行時間競争の亡霊に苦しめられているようでは全く修行が足らんワイ。

駒ヶ岳の山頂には祠が幾つか祀られていて、昔は信仰登山が盛んであったことを窺わせる。深田久弥によれば、江戸時代には西野御嶽山と並んで行者登山が栄えたらしい。当時の登山口は木曾側であり、駒の上に木曾を冠せていることから木曾駒は伊那谷のものではなく、木曾谷のものだったのであろう。

山頂からの眺望は360度、南には宝剣岳の岩峰越しに空木岳、南駒ヶ岳の中央アルプスの稜線、北西には独立峰の御嶽がどっしりと大きい。その右肩の辺りに加賀の白山も顔を覗かせていた。北側には乗鞍から白馬岳まで北アルプスが見渡せる。槍の顕著な穂先もはっきりと見えた。更に目を廻せば、遙か北東に浅間山が薄い噴煙を上げている。八ヶ岳は思ったより山容が小さく見えるが、キレットははっきりと識別できた。昭和40年のゴールデンウィークに大学の呑友7人でこの山に登ったことがあったが、赤岳から権現岳へのこのキレットでモリヤーノが足を滑らして滑落、たまたま小枝に掴まることができて、すんでのところで命拾いしたことが想い出された。それ以降彼は山に近づいていない。

南アルプスは比較的穏やかなスカイラインを描いているが、北端の鋸岳のギザギザしたシルエットと隣の甲斐駒のピラミッド、どっしりとした塩見岳のツインピークが印象的であった。塩見岳の左には富士山も見えた。

帰路、宝剣岳頂上へのルートを見ると、確かに頂上直下の雪渓がキツそうだ。しかし、何とかかなりそうにも見えるし、初めから登頂予定にも入れていたことでもあるから、ここで断念しては男が廃という欲股と見栄で今朝指導員から止められたのも無視して登り始めたが、やはり先達の言には謙虚に耳を傾けねばならないことを痛感する結果と相成った。宝剣山荘の上のコブを越してみると、二人組のパーティーがアンザイレンで登っている。様子ではかなりのベテランらしい。右下の斜面はすっぽりと宝剣沢に切れ落ちていて、しかも雪面は完全に氷化している。滑落すればそのまま地獄に直行間違いなし。件の指導員の話では昨日もここで遭難事故が起こったこと、本田勝一の『50歳から再開した山歩き』の中にも毎年ここで遭難が起こっていることが記されていることなどがチラッと頭をよぎる。

暫く、行こか戻ろかと思案を巡らせていたが、又もや理性が見栄と欲股に負けた。急な宝剣沢上部の狭いアイスバーンをトラバースしてから、急に恐怖心に囚われた。足が震えだして立ってられない。手近の岩も凍結していてホールドが無い。進退窮まる状況と相成った。ピッケルのピックを打ち込んでも氷が薄いのですぐ抜けてしまう。アイゼンの爪だけを頼りに座り込む。動悸が激しくなってきた。引き返すよりも登る方が多少とも易しい気もするが、頂上の向こう側の南稜は更に厳しいと聞いている。頂上までは登り得たとしてもこちら側に下り戻れる自信も全く無い。御名御璽。

ここで、大英断を以て退却と書きたいところだが、事實は上の如し。頂上まで後50mほどの所であった。暫く座り込んだ後（不安定な足場であるし、足も震えているので今にも滑り出しそうで生きた心地がしない）、心を落ち着けてから引き返したが、足の半分を置けるフットホールドがやっとで、方向転換に難渋。しゃがみこんだまま足を入れ替えるという叩きつけられた蛙のような無様な恰好でやっと平

坦な場所まで移動した。指導員の警告を無視したという心の乱れが自信を喪失させ、見栄と欲股と恐怖の逡巡が足を震えさせたとみるべきだろう。素直に反省します。



(中岳付近から宝剣岳)



(稜線の右が宝剣沢)

〔補遺〕

木曽山地には雪型が伝わる山が多い。木曽駒ヶ岳のすぐ下の中岳に出る農耕馬と種まき爺さん、将棋頭山の走る馬、サルダギの島田娘、南駒ヶ岳の五人坊主などが知られている。

この木曽駒ヶ岳の山名の由来は種々の説が伝わっていて、稜線の形が神秘的で如何にも龍（龍は神馬と同義）が住んでいるから駒ヶ岳だという古書説、この地方から神馬を献上したからという続日本紀説、山中に凄い形相の茸毛馬が住んでいたという新著聞集説など、色々あるらしいが、やはり農耕にからむ馬の雪型からの命名というのが素朴ではあるが、それだけに妥当性が高いと思われる。（本稿 完）

[「怖かった山々」目次に戻る](#)